

ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 菅井洋子

(記入日：2024年2月25日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

保育士資格と幼稚園教諭一種免許取得をめざす保育者養成学科へ所属しており、以下の「資格や免許取得にかかわる科目」及び「学科科目」を担当している。

〈資格・免許関連科目〉

「保育の心理学」(前期、1年次、必修科目、講義)

「教育心理学」(前期、3年次、必修科目、講義)

「言葉」(前期、2年次、必修科目、講義)

「保育内容言葉の指導法」(後期、2年次、必修科目、演習)

「子どもの理解と援助」(後期、3年次、選択必修科目、演習)

「保育実習演習Ⅲ (事前事後指導)」(通年、3年次、必修科目、演習)

「保育実習Ⅲ」(通年、3年次、必修科目、実習)

〈学科科目〉

「幼児教育体験学習」(通年、1年次、必修科目、演習)

「幼児教育演習」(通年、3年生、必修科目、演習)

「卒業研究」(通年、4年生、必修科目、演習)

「卒業研究演習」(通年、4年生、必修科目、演習)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

建学の精神に基づく本学科がめざす保育者像(「子どもとともに生きることができ、自覚ある保育者」「すべてのひと・もの・ことに感謝できる保育者」)や学科の特性、そして学生の姿をふまえながら、専門的(学問的)知識に触れ保育・幼児教育における具体的な事例や体験等をもとに人の発達や子ども理解を深めることを理念としている。とくに「子どもの視点」から保育者の役割や援助、環境構成等を考え、意味を深く理解し、主体的に行動できるようになることを教育目標として教育活動を行っている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学科内の「4年間の学びの流れ」や「各学年で学ぶ内容」、「保育実習・幼稚園教

育実習」をもとに担当授業科目を位置づけ、授業間のつながりを考慮し関連づけ、学科内の教員と協働し、附属保育園とも連携しながら学生の学びが深まるように工夫した（以下に今年度工夫した授業例をいくつか述べることにする、下線科目が担当科目）。

例) 1年次「保育の心理学」〈乳幼児の発達〉と2年次「子どもの理解と援助」〈子どもの体験と発達に応じた援助等〉⇒2年・3年次保育実習Ⅰ・Ⅲ⇒3年次「教育心理学」〈子どもの発達や学びの過程と保育等〉

例) 1年次前期「保育の心理学」〈身体・運動・知覚・言語の発達等〉と1年次通年「幼児教育体験学習」〈科学博物館見学での子ども体験からの学び、附属保育園での保育体験〉⇒保育実習・幼稚園教育実習

例) 2年次後期「保育実習演習Ⅰ事前事後指導」と「保育内容言葉の指導法」「子どもの理解と援助」⇒「保育実習Ⅰ」「保育実習Ⅲ」「教育実習」へ

学科内の保育内容の指導法を担当する専任教員で保育実習Ⅰと保育実習Ⅲの部分実習・責任実習を見通した授業計画を立て連携しながら授業を実施した。担当した「保育内容言葉の指導法」では、絵本を読む等の保育文化財を含む模擬保育を立案から実践、振り返りまで実施した。模擬保育時には「保育者役」と「子ども役」に分かれ、昨年度に続き今年度も同時期に受講している「子どもの理解と援助」の授業で作成した実寸大の子どもたちを用いて子どもの目の高さから撮影しながら模擬保育に参加し子どもにとってどのように見えているのかの観点も含め考察することを試みた。子どもの目の高さから撮影した「写真」と、模擬保育実践を録画した「録画映像」による振り返りを実施し、個人、グループでの振り返りのもとに子ども理解を深めながら保育のPDCAサイクルを経験し、保育・教育実習への準備を実践的に進める試みを行った。

等

また、保育者になるための力を養うためには、多様な「人」と関わり協働しあうこと、そして様々な「道具や方法」を用いて活動すること等が必要である。そこで、授業内で複数の学生達が関わり協力しあうアクティブラーニングやICT活用の機会を設けている。パソコンやiPad、カメラ、子ども体験キット（視野メガネ）等の道具を実際に活用し、気づいたことや考えたことを伝え合い、表現する方法としてデジタル媒体や紙媒体を用いて発表する等、授業内容とともにこれらを意図的に導入する工夫をしている。とくに多様な双方向型、対話的授業を展開するために工夫している。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

学生の振り返り記述（コミュニケーションシート、Forms の記述等）や授業評価アンケートの結果から、他の学生とディスカッションし多様な考えに出会い新たな見方ができるようになり今後活かしていきたいことや、グループで活動し大変なこともあったが保育者として必要な相手のことを考え協力していく力をつけていきたいこと等、授業者が理念・教育目標として考え、授業内で工夫して実践した多様な方法をめぐる記述がなされていた。

授業への参加方法や資料作成・発表等については、学生により経験差がみられることから、学生の現状を確認しながら多様な道具や方法に触れることができるように検討していく必要があると考える。

5 今後の目標（これからどうするか）

今年度は、学内の教育研究奨励のもとに学科教員で保育者の専門性を育む保育者養成教育を探究し授業を展開した。本学科のカリキュラムにおける各々の授業の連続性を考えながら、学科教員間での連携・協働のもとに実施した。学生達の実習後の振り返りにおいては、今年度教員が連携し実施した授業（保育内容 5 領域を担当する教員の授業）をつなぎ、5 領域について総合的にとらえる視点や理解を深めたことが語られた。今年度を振り返りながら、各学年の学生の姿をもとに、科目間・教員間の連携のもとに 4 年間見通した教育活動を今後も進めていくことにする。

さらに、保育・教育実習の実態をふまえた教育活動を展開していくために、昨年度から保育実習担当教員で授業改善等へ向けた共同研究を続け大学の紀要や教職センター年報等にまとめ続けている（「学生の主体的な姿をふまえた保育実習授業の展開に向けて」等）。今後は、近年の動向をふまえ、保育と感染症対策や ICT との関連も含めた実態に応じた実習指導や教育活動を展開していけるように、保育者養成 4 年間（より長期的には入学前の高校生から卒業後の卒業生までの保育者の成長過程含む）実習担当教員間で連携・協働しあい縦断的に取り組んでいくことにする。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 授業毎に学生が記述する「コミュニケーションシート」(紙・Forms) (未公開)
2. 学生による授業評価アンケート
3. テキスト

等

以上

ティーチング・ポートフォリオ

学科：幼児教育学科 氏名：竹内 啓

(記入日：2023年8月30日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「保育内容の理解と方法 (造形)」

「幼児造形指導法」

「子どもの造形」

「日本文化実技Ⅴ(1), (2)」 (日本文化学科の実技授業)

「幼児教育体験学習」 (幼児教育学科教員全員で担当)

「幼児教育演習」

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

将来、保育者になる学生がまず自分の五感で感じたことを大切にし、そこから自ら発想し考え、楽しんで表現や行動ができる自信を育てる。その上で子どもたちが表現を楽しみ成長できる機会を作るなどの環境を整え援助ができるように導き支える。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

実際に自分の目で観察する機会を作り、観察したもの、ことがらを大切に自信を持って表現できるよう一人一人の状況に合わせて丁寧にアドバイスしていく。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

授業内で一人一人の状況に合わせて指導していくのは手間がかかるが、苦手意識が強い学生が自分の表現に少し自信を持つようになってきている。

しかし正解を求めて既成の例を参考にすることがあり、安易に真似することで自ら発想しようとしないう学生がいる。

5 今後の目標 (これからどうするか)

他の学生がどのように発想しているかを紹介し、互いにアイデアのヒントを与え合うようにしたりしてやる気を盛り上げるようにする機会を増やす。同時にきめ細かい声かけによりさらに一人一人の学生自身の感じ、考えていることを把握しアドバイスの仕方を工夫して自分の感性に自信を持たせる。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・制作した作品を集めた「スケッチブック」
- ・学生が記入した授業の「振り返り」、教員の「コメント」

(記入日：2024年2月12日)

1. 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

①幼児教育学科専門科目

保育者論（1年、選択必修科目、後期2単位）

子ども家庭福祉（1年、選択必修科目、後期2単位）

社会福祉（1年、選択必修科目、前期2単位）

社会的養護Ⅰ（2年、選択必修科目、後期2単位）

幼児教育体験学習（1年、集中必修科目、2単位）

幼児教育演習（3年、選択必修科目、通年2単位）

保育実習演習Ⅱ（事前事後指導）（3年、選択必修科目、通年1単位）

保育実習Ⅱ（3年、選択必修科目、通年2単位）

卒業研究（4年、必修科目 通年4単位）

②共通教育科目

簿記（1）（1～4年、選択科目、前期2単位）、

日本の財政（1～4年、選択科目、前期2単位）

キャリアプランニングⅡ(1)（1～4年、選択科目、後期2単位）

2. 理念（なぜやっているか：教育目標）

①幼児教育学科専門科目

・学生が子どもや利用者さんを含めた対象者に対する制度や政策を理解し、さらに子どもや利用者さんを巡る現代の問題について理解し、事例を通して保育士としてその問題について必要な知識や方法を考え保育士としての役割や保育所の役割機能そして、保育所を巡る専門機関や専門職との連携について考え学ぶ機会を提供することである。

・子どもや保護者をめぐる環境や背景を考えながら、子どもや保護者に寄り添い支援を共に考えられる保育者となるため。

②共通教育科目

・共通教育科目については、経済が自分の生活の中の身近なものであることに気づき、経済用語を理解し、自分の日々の生活の中でその経済活動を行っていることや身近なものの経済事象を理解し、生活に生かすことを目的としている。

・

3. 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

①幼児教育学科専門科目

・教科書とレジュメを使いながら、学生がイメージを持って具体的に学まなべるよう、解説及び動画等による事例の紹介を行い、当事者の状況を理解し課題や意見を共有できるようにしている。また、子どもや利用者さんの理解を深めるために事例研究を行い、その内容を共有することで、他者の考えや他者を受け入れ、支援方法を気づくようにしている。

- ・児童相談所のフォスタリング事業をいている職員の方を招き、里親支援の現状や里子や里親に対する支援、里親制度を理解するために行っている。
- ・子どもと保護者を取り巻く状況について事例を通して考えながらソーシャルワークの基本であるバイステックの7原則を中心とした相談援助の技法の大切さについて事例を通して認識してもらう機会を多く作った。
- ・児童養護施設に勤務している卒業生を特別講師として招き、社会的養護の子どもの状況や子どもの家庭環境、背景、子どもの状況や支援の内容等を聴き、社会的養護への理解を深めている。
- ・子ども家庭福祉の教科書（浦田雅夫編(2020)『新・子ども家庭福祉』教育情報出版）については、一部分担執筆している。

②共通教育科目

- ・身近生活のトピックに合わせながら、簿記の勘定科目の意味等の知識が身に着くように、学生が理解しているか対話をしながら授業を進めている。また日商簿記3級合格を目指し、過去問題を繰り返し解いて、学生自身の理解不足や苦手な部分がわかり、それを克服できるようにしている。
- ・キャリアランニングII(1)については、出題されやすい分野を学生がイメージしやすいように実生活に即した事例で説明している。また、その上で、その分野に関する過去問題を数種類解き、類似の問題が出た場合も理解できるよう、繰り返し問題を解き、回答するようにしている。さらに自分で自分の住んでいる自治体のことを調べる等、身近なものを調べて興味を持つような形とした。

4. 成果（どうだったか：結果と評価）

①幼児教育学科専門科目

- ・専門科目については、課題の解答を共有し、他者の意見も知ることで、自主的に学び、自分の表現力を磨き、他者の意見を理解しようとしていることが確認できた（エビデンス1）。レジュメを作成し、重要な部分を明確にし、事例を説明しながら学生の理解を深められるようにした結果（エビデンス2）、子どもや保育を巡る課題について自分から調べるようになった。

②共通教育科目

- ・経済を身近に感じる教材（エビデンス2）を利用し、さらに課題の解答を共有し、学びを再確認する（エビデンス1）するとともに、自分で自分の住んでいる市町村や興味のある市町村の歴史や施策の取り組みなどを調べることにより、自分のまちに興味をもち、自分で調べる力を養った（エビデンス1）。

5. 今後の目標（これからどうするか）

①幼児教育学科専門科目

- ・学生同士が授業時間外に子どもを取り巻く課題や保育所や施設の役割・機能を相談、議論し、資料収集、データ収集（ラーニング・コモンズ）し、事前事後学修をより具体的に理解できるようにする。
- ・子どもと保護者を取り巻く現状を事例を通して、様々な環境や背景を創造しながら、支援に結び付けることができるように、繰り返し事例とグループワークを通して行う。

②共通教育科目

- ・学生がホームページ等を用いて、自分の住んでいる自治体や保育所が取り組んでいる内容を調べ、学びと自分の住んでいる自治体の取り組みを理解し、より課題がより具体的になるようにする。
- ・簿記の流れを理解するために、決算までの全体の流れを見通せるプロットを繰り返し、定時し説明を繰り返すことにより、どの部分の仕分けを行っているかを理解できるようにする。

6. エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 幼児教育学科の学修ポートフォリオ（非公開）

2. 授業のレジュメ（非公開）

3. 教科書

- ・社会福祉 志濃原亜美編(2022)『みらい×子どもの福祉ボックス 社会福祉』みらい
- ・子ども家庭福祉 浦田雅夫編(2020)『新・子ども家庭福祉』教育情報出版
- ・保育者論 公益財団法人児童育成協会監修(2019)『保育者論』中央法規
- ・社会的養護 I 喜多一憲監州(2023)『みらい×子ども福祉ボックス 社会的養護 I』みらい
- ・保育実習演習Ⅱ（事前事後指導） 民秋言他編（2018）『施設実習【新版】』北大路出版
- ・簿記(1) 滝澤ななみ（2023）『スッキリわかる日商簿記3級第14版』TAC株式会社

ティーチング・ポートフォリオ

江村綾野（幼児教育学科）

（記入日：2023年9月18日）

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

- 乳児保育Ⅰ（1年後期選択必修科目 2単位）
- 乳児保育Ⅱ（2年前期選択必修科目 2単位）
- 子育て支援（3年後期選択必修科目 2単位）
- 子ども家庭支援の心理学（3年前期選択必修科目 2単位）
- 幼児理解の理論と方法（3年前期選択必修科目 2単位）
- 保育教職実践演習（幼稚園）（4年後期選択必修科目 2単位）
- 保育原理（1年前期選択必修科目 2単位）
- 子ども家庭支援論（3年前期選択必修科目 2単位）
- 保育実習演習Ⅰ（事前事後指導）（2年後期選択必修科目 1単位）
- 保育実習Ⅰ（2年後期選択必修科目 2単位）
- 卒業研究演習（3年必修科目 2単位）
- 卒業研究（4年必修科目 4単位）
- 幼児教育体験学習（1年集中必修科目 2単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、以下の2点である。

- ①学生が幼児教育・保育に関する専門的知識と実践力を身に付けること
- ②学生が大学内外のヒト・モノ・コト（全ての環境）に自立的に関わり、一人の人間として、女性として、保育者として感謝する心と態度を身に付けること

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

- ・授業においては、学生の主体的能動的な授業参加を促すためにグループワーク、ペアワークなどのアクティブラーニングをできる限り取り入れている。
- ・保育現場に則した教材（テキスト、視聴覚教材、保育教材、児童文化財など）を用意している。
- ・保育実習演習Ⅰ、保育実習Ⅰは幼児教育学科学生が履修する最初の科目である。厚生労働省が定める「保育実習の目的」をふまえ、本学独自の教材を用いて

指導している。また、実習では健康第一であることはもとより、学生自身が実習園と対応する場面での言葉づかい、立ち居振る舞いなど、本学学生として「明るく、元気に、さわやかに」をモットーに信頼される実習生となるように挨拶の徹底を指導している。

・現代社会において保育所等が地域と連携することは重要な課題となっている。今年度、幼児教育学科の教育研究奨励活動の一環として学生の地域活動の実践を手掛けている。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

・授業においては、講義、演習（ワークシートなど）、振り返りの循環を確認した（エビデンス1）。新カリキュラムに即した教材（エビデンス2）を使用している。また、演習科目（乳児保育Ⅱ、保育実習演習Ⅰ）で実施した実技指導では、保育内容に関する具体的実践の理解が促されたと考えている。

・これまでコロナ禍の保育実習に関する報告を控えてきた。実習の中止や延期等の対応がいつまで続くのか、社会的要請に見合った実習教育ができるのかなど、実習担当教員として先の見通しが不透明であったことがその理由である。振り返ると2020年度から2022年度までのコロナ禍中の実習は私の実習指導経験において特別なものであった。とくに2021年2月の実習では次々と実習園から中止、延期の連絡が入り、実習中の学生が感染するなど、対応に窮したことが度々あったが、結果的に学内実習を行うことはなかった。全国保育士養成協議会の資料によると、2021年2月の保育実習を予定通り実施できた養成校は全国で約20%だったという報告がある。コロナ感染状況が深刻だった時期の実施は教員として葛藤があったことは否めないが、現場での学びは学内実習とは比較にならない大きいものがあることはいうまでもなく、学外での実習に拘り、保育実習Ⅰを履修した学生全員が実習を完走できた。このことは、実習園の協力、大学の支援だけではなく学生が健康管理に留意し最後まで諦めず対応したことによるものだと考える。2020年4月に入学し、2024年3月に卒業する幼児教育学科学生は、保育実習、教育実習の計5回の実習をすべて学外（保育の現場）で経験して卒業することは学科の実習担当教員が一丸となって取り組んだ成果と考える。改めて記しておきたい。

・学科の地域連携の取り組みの一つとして、サークル（ONE+）を立ち上げた。川村学園女子大学附属保育園子育て支援センターの活動（ラブリーデイ）に参加

している。

・学科の教育研究奨励活動における地域連携の取り組みとして、8月6日にNPO法人子ども環境 Museum アフタフバーバンから講師を招きワークショップを行った。このワークショップでは学生が表現することの楽しさやワークショップに参加する親子とふれあうことで保護者支援を学ぶことをねらいとしていた。参加した学生たちは親子とふれあい、かかわり合うことで保護者とのかかわりや地域で子どもを共に育てることの意義を学ぶことができたのではないかと考える。

5 今後の目標（これからどうするか）

・個々の学生の学修到達状況をふまえた課題内容をさらに工夫したい。
・川村学園女子大学附属保育園と連携した地域子育て支援の取り組みについて検討したい

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1 リアクションノート（非公開）

2 テキスト 乳児保育Ⅰ、乳児保育Ⅱ、子育て支援、子ども家庭支援の心理学、幼児理解の理論と方法、子ども家庭支援論、保育実習演習Ⅰ（事前事後指導）で使用

3 学生の地域連携活動については、学科 SNS（Instagram、X）、大学ホームページ内学科ニュースで報告している。

以上

ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 氏名 関本 仁

(記入日：2023年 2月 29日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

幼児教育学科専門科目

- ①教職入門（1年、必修科目、前期2単位）
- ②教育原理（1年、必修科目、後期2単位）
- ③幼児教育体験学習（1年、集中必修科目、2単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

幼児教育学科専門科目

- 教職に就くということに関し、できる限り多くの観点から考察をおこない、学生各人の教職への意欲を確認し、その適性について自ら考え、進路を判断するために必要となる知識を獲得すること、教育思想とその方法の歴史を概観しつつ、その様々な思想が現在おこなわれている教育に対してどのような影響を与えているのかについて考えることができるよう、理論的側面に注目して学ぶことによって個々の学生それぞれが理論的土台を持った教育観・保育観を言語化させることが出来るようになる。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

幼児教育学科専門科目

- 入学したばかりの学生たちにとって、教育学に関わる内容については教科学習でカバーされてはいないこともあり、これまであまり触れることはなかったと考えられる。そして、今後教育・保育のあり方について個々が思考したり、他者と議論していくにはそのために用いる材料としての知識がかなり不足していると考えられる。そのため、知識の理解に重点を置き、それぞれの知識・事項について各自がそれぞれの関心の方向性模索しながら最終的に総合するかたちとしての期末レポートという言語化というゴールへ繋げた。予め次の回の授業で焦点化させる内容についての資料を配付し、教科書と併せ個々の学生が問題の焦点化が出来るよう、予習を促した。また、各回の終

了後については内容を復習する意味で各自が内容をまとめ整理し、新たに表出した疑問点などを見つけることが出来るよう、UNIPA 上にてリアクションペーパーの提出を課した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

幼児教育学科専門科目

- 提出されたリアクションペーパーやミニレポート、期末レポートという段階を踏まえた各学生の記述を検証すると、授業内でも強調したことであったが、web 上だけで手軽に情報を入手するだけでなく、ジャーナルや書籍の資料にしっかりとあたることで根拠を持った情報を踏まえて自分の考えを言語化するということが出来る学生がいた一方、かなりそのようなことが不十分で有、復習等も十分でなかった学生がいたことも確かである。これは、授業評価アンケートにおいても正直に回答してもらえたことから、本人に十分に自覚があるということは確認できた。

また、知識の理解に重点を置きすぎた面が否めず、対話・議論の場が十分に確保できなかったことは大きな反省材料である。そして、その知識の理解についての確認が十分に取れていたかという点、これもまた不十分であったと言わざるを得ない。

5 今後の目標（これからどうするか）

幼児教育学科専門科目

- 知識の理解、という面における改善は、3 回に 1 回くらいの頻度で確認テストを実施し、必要最小限の知識は身に付けられるようにしていく。
- ある程度学生が各自で前もって調べておくような課題を課し、よりも悔いの意識を待って授業に臨めるような環境を設定する。
- 配付する資料についても各回で焦点化させるべきことは 1/2 個ほどで留め、そこをしっかりと掘り下げていくような内容を展開させていくことによって新たな疑問・課題・関心が表出できるよう、仕掛けを作っていく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ① 幼児教育学科の学修ポートフォリオ（非公開）
- ② 授業の各回配付資料（レジュメ）（非公開）

③授業の各回終了後に課している UNIPA 上でのリアクションペーパー（非公開）

④教科書

安彦忠彦,藤井千春,田中博之編『新版 よくわかる教育学原論』ミネルヴァ書房,2020年。

ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科

氏名 古屋朝映子

(記入日：2024年 1月 16日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「保育内容の理解と方法 (運動)」(1年次～通年選択必修科目 2単位)、「子どもと運動」(3年次～前期選択必修科目 2単位)、「幼児運動指導法」(3年次～後期選択必修科目 2単位)等を担当している。

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、保育者を目指す学生が、乳幼児の生活と遊びを豊かに展開するために必要な運動に関する教材等の知識や、環境構成および具体的展開のための技術について、実践の中における主体的活動を通じて身につけることである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学生の主体的な学びを促し、実際に身体を動かした実践の中での学びと理論とを結びつけられるようにするために、「保育内容の理解と方法 (運動)」の授業において、毎回の授業後に、実践した実技の内容を記述するとともに、授業の内容から学んだことや質問等を記入する自作の「学修ノート」を使用し、授業を展開している。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

「学修ノート」の振り返り記述を見ると、学生が授業で実践した内容について振り返りを行い、学びを深めていたことが分かる。また、毎回質問事項を記入させているが、質問の内容が授業の回を追うごとに、深い内容になっていることも確認できた。(エビデンス 1)

5 今後の目標 (これからどうするか)

今後は、「学修ノート」に記された質問内容への返答を個人だけではなく全体で共有するなど、「学修ノート」から得られた学生の姿をより反映させた授業を展開していきたい。

6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

- ・エビデンス 1：「学修ノート」(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

北村真理（幼児教育学科）

（記入日：2023年9月29日）

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

- ・保育内容の理解と方法（児童文化）（1年前期選択必修科目 2単位）
- ・幼児指導法総論（4年前期選択必修科目 2単位）
- ・児童文化（2・4年後期選択必修科目 2単位）
- ・教育実習演習（事前・事後指導）（一次・二次）
（3・4年前期後期選択必修科目 1単位）
- ・教育実習（3・4年選択必修科目 4単位）
- ・保育・教職実践演習（幼稚園）（4年後期選択必修科目 2単位）
- ・幼児教育体験学習（1年通年必修科目 2単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、以下の三点である。

- ① 学生が主体的に学び幼児教育・保育に関する専門的知識と実践力を身に付けること
- ② 幼児教育・保育、児童文化に対する興味・関心を高め、豊かな人間性を養い、たくましく生きる力を育む
- ③ 体験活動や教育実習を通して、体験することによって得られる学びを肌で感じ、保育者になる使命感や自覚を高める

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

- ・授業では、毎回の授業において全体や個人に質問を投げかけ、学生が主体的・能動的に授業へ参加できるように促している。また、グループワーク、ペアワークなどを取り入れ、アクティブラーニングができる環境も整え、相互の意見を知る・学ぶ機会を設けるようにしている。
- ・実務の教員経験を活かし、経験談を基に教育・保育の方法を伝え、学生が創意工夫しながら実践でき、且つ現場ですぐ生かせることができるように授業を行っている。
- ・保育現場に則した教材（テキストを印刷したもの、視聴覚教材、保育教材、児童文化財など）を用意している。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

・授業においては、講義、演習（ワークシートや提出など）、振り返りの循環を確認した（エビデンス 1、2、3、4、5）。

保育内容の理解と方法（児童文化）、児童文化の授業で実施した実技指導では、保育内容に関する具体的実践の理解が促されたと考えている。また、幼児指導法総論では、学生自ら保育内容のカリキュラム（年間スケジュール（行事）、月案、週案、日案）の立案を経験することで、実践力を身に付けることができ自信に繋がっていた。

・学科の地域連携の取り組みの一つとして、サークル（ONE+）を実施している。川村学園女子大学附属保育園子育て支援センターの活動（ラブリーデイ）に学生の顧問且つ引率教員として参加している（エビデンス 6）。

・学科の教育研究奨励活動における地域連携の取り組みとして、8月6日にNPO法人子ども環境 Museum アフタフバーバンから講師を招きワークショップを行った。学生が表現することの楽しさを感じながら実演の方法を学ぶこと、ワークショップに参加する親子とふれあうことで保護者支援を学ぶことをねらいとしていた。このワークショップには、上記の ONE+サークルの学生やその他で参加を希望する学生をスタッフとして運営した。参加した学生たちは、親子とふれあい、かかわり合うことの重要さや実演の方法の工夫を学ぶ楽しさを感じることができたのではないかと考える（エビデンス 6）。

5 今後の目標（これからどうするか）

- ・個々の授業に対する授業への理解度や学修到達状況を確認しつつ、その状況を踏まえた課題や内容を更に工夫していきたい
- ・着任して半年が過ぎたが、更に学生一人一人に寄り添い関わりながら、徐々に信頼してもらえるように努めたい

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ① ワークシート（非公開）
- ② グループワーク・ペアワークシート（学内のみ）
- ③ 学生のポスター発表（学内のみ）
- ④ 振り返り・課題提出シート（非公開）

- ⑤ テキスト (印刷物) : 幼児理解の理論と方法 (児童文化)、幼児指導法総論、
児童文化で使用
- ⑥ 学生の活動については、学科 SNS (Instagram、Twitter)、大学ホームページ内学科ニュースで報告している。

以上

ティーチング・ポートフォリオ

学科： 幼児教育学科 教員名： 白石優子

(記入日：2024年2月28日)

1. 教員の責務（何をやっているか：担当科目）

下記に挙げる専門教育科目、保育・教職に係る専門教育科目、共通教育科目を担当している。

<専門教育科目>

「基礎ゼミナール」（1年次 前期 必修科目 2単位 演習）

「幼児教育体験学習」（1年次 通年 必修科目 2単位 演習）

「幼児教育演習」（3年次 通年 必修 4単位 演習）

「卒業研究演習」（4年次 通年 必修 4単位 演習）

「卒業研究」（4年次 通年 必修 2単位 演習）

<幼児教育に関する専門教育科目>

「人間関係」（2年次 後期 保育士・教職必修科目 2単位 講義）

「保育内容人間関係の指導法」（2年次 後期 保育士・教職必修科目 2単位 演習）

「子ども家庭支援論」（3年次 前期 保育士・教職必修科目 2単位 講義 オムニバス）

「教育実習演習（事前・事後指導）」（4年次 前期 および 3年次 後期 教職必修科目 1単位 演習）

「教育実習演習（事前・事後指導）」（4年次 集中 教職必修科目 児童教育学科 1単位 演習）

<共通教育科目>

「情報リテラシー」（1年次 前期 必修 演習）

「子育て論」（2年次 後期 選択 講義）

2. 理念（なぜやっているか：教育目標）

近年、子どもや若年世代を取り巻く環境は、刻々と変化し、より複雑になってきている。そのような中でも、自らの心理的安全、物的安全を確保し、さらに保育の専門職として子どもやその養育者の安心・安全に寄与できる人材の育成を目指している。人や社会の多様性を認め、他者と協力し、時代の変化に適応できる知識と技能を取得できるよう、学生が主体的に学ぶ授業展開を意識し、教育に取り組んでいる。

3. 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

① 時事問題と関連づけた授業展開

例 1) 親子や保育者と子どものコミュニケーションについて、マスク生活による弊害を子どもの認知発達の視点から検討した。「人間関係」

例 2) データサイエンスの例として、スーパーコンピューター富嶽による飛沫のシミュレーションを紹介した。「情報リテラシー」

例 3) 情報セキュリティ危機の例として、大阪急性期・総合医療センターにおけるランサムウェア被害を紹介した。「情報リテラシー」

② 映像資料の活用

例 4) 家庭での親子の遊び場面観察や乳幼児を対象とした行動実験の映像を紹介し、視覚的資料を提示することで、より詳細な理解を促した。「人間関係」「幼児教育演習」

③ 体験的な学び

例 5) ワークショップ形式で子ども理解や子どもとのかかわりを学ぶことを目的とし、公的機関の研修でも使用される CARE（子どもと大人の絆を深めるプログラム）を取り入れた。多くのロールプレイが含まれており、子ども役、保育者役になって玩具を使い遊ぶ体験を重ねた。「人間関係」「幼児教育演習」

例 6) メールの使い方の練習として、学内のお気に入りスポットを探し、写真を撮ってメールに添付して送信する課題を設定した。「情報リテラシー」

④ ICT の活用と安全な使用に関する情報提供

例 7) 資料の配布、課題提出について、Teams のクラスや課題機能を使用した。「人間関係」「幼児教育演習」「情報リテラシー」「基礎ゼミナール」

例 8) レポート作成等で調べ学習を行う際には、一般的な検索エンジンのほか、学術用途で用いる検索サイト Google Scholar や政府統計等のサイト e-Stat 等を紹介し、学術情報へのアクセスを促した。「人間関係」「幼児教育演習」「情報リテラシー」「基礎ゼミナール」

例 9) ネット依存や SNS におけるリスク等に関する事例や資料を提示し、安全な ICT 利用の重要性を伝えた。小レポートの課題に設定することで学生が自ら調べ、自分の生活に引き寄せて考察できるよう工夫した。「情報リテラシー」

⑤ アカデミックライティングの指導

例 10) 小レポートや期末課題は、個々に添削を行い返却した。とくに、パラグラフライティング、引用文献の示し方、口語表現を避けることなどを指導した。課題によっては、見本を作成し、作成例を具体的に示した。「人間関係」「基礎ゼミナール」

⑥ 双方向型授業

例 11) 授業終了後に質問や疑問を収集し、翌回の授業で回答したり、全体でディスカッションする時間を設けた。「人間関係」

例 12) データサイエンスのテーマでは、4月のガイダンスで学生が体験したカード出し

ゲームを使い、ゲームの勝敗数をエクセルシートにまとめ、グラフを作成することを通して、エクセルの技術を学んだ。「情報リテラシー」

4. 成果（どうだったか：結果と評価）

① 時事問題と関連づけた授業展開

学生自身が身近な社会問題に関心を持ち、自らの体験に引き寄せて考察する様子が発表等で見受けられることもあった。しかし、普段から時事問題に触れる機会が少ない学生もいるようで、身近な社会問題への関心の低さがうかがえた。

② 映像資料の活用

幼児の観察や実験等の映像では、自ら映像から気づきを得ようとする姿が見られた。発達に応じた視線や表情、手の動き、発声・発話を捉える教材として有効であったと考えている。しかし、映像の画面を提示しても全く見ようとせずうつむいたままの学生もあり、意欲や関心を高める工夫が必要であると感じている。

③ 体験的な学び

子ども役、大人役、観察者という役割を確認しても、全員が玩具で遊んでしまうグループもあり、ロールプレイの意義を伝えることに苦戦した。しかし、子どもと話すときの自身の癖に気付いたり、どのような場面で使えばよいかなど具体的に考察する姿もあった。なかには、アルバイト先などの保育現場で試し、子どもとの関係性の変化を報告する学生もいた。

机上での学習に集中できない学生も少なくなく、動く活動を取り入れたことが有効であったと考えられる。

④ ICTの活用と安全な使用に関する情報提供

ネット依存の啓発を心がけているが、授業中の SNS やチャットアプリの利用をやめられない学生が散見された。

昨年度「人間関係」を受講した学生の情報検索技術の向上がうかがわれた。「子ども家庭支援論」の課題では、多く学生が適切な資料を得ることができていた。「幼児教育演習」においても、Google scholar による文献検索に慣れてきているようであった。

⑤ アカデミックライティングの指導

複数回のレポート添削を経た結果、パラグラフライティングやレポートとしての体裁を整える等、全体としてはライティングスキルが改善したと考えられる。しかし、引用の仕方には課題が残る。

⑥ 双方向性の授業展開

学生の参加を促すには有効な方法であったと考えている。授業評価アンケートでも、好評であった。

5. 今後の目標（これからどうするか）

本学着任から2年が経ち、学生との信頼関係は築かれてきていると感じる。授業の進行に協力してくれる学生が増えてきたものの、一部に授業と関係のないスマートフォンの使用や別の科目の課題を行う学生が散見される。授業内容が、実習や卒業後の職業生活にどう活かされるか学生自身が想像できる工夫をし、学習意欲を高めることが必要であると考え。

6. エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 学生が提出した小レポートやプレゼンテーションの課題（Teams で提出し、後日コメントをつけて返却した） 非公開
2. 教員作成による授業資料 非公開
3. 学生による授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

学科 幼児教育学科

氏名 山下佳香

(記入日：2022 年 9 月 15 日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

2022 年度 4 月より川村学園女子大学の講師として着任し、現在、担当している科目は以下のとおりである。

○幼児教育学科 1 年生

「幼児教育体験学習」 通年 2 単位

「保育内容総論」 後期 2 単位

○2 年生

「環境」 前期 2 単位

「保育内容環境指導法」 後期 2 単位

「保育の計画と評価」 前期 2 単位

「保育実習Ⅰ」 後期 2 単位

「保育実習演習Ⅰ」 後期 1 単位

○3 年生

「保育実習Ⅲ」 通年 2 単位

「保育実習演習Ⅲ」 通年 1 単位

「幼児教育演習ゼミナール」 通年 4 単位

○4 年生

「卒業研究」 通年 4 単位

週初め 2 限目の授業であるため、学生たちが一人一言は発言できる場を設けた。

「環境」とは…何か…を考え、なぜ五領域の一つでもあるのか、「環境の重要性」について 15 回の授業で考えた。自分たちが当たり前としている目の前の環境の意味や意図を知るために大学構内の自然環境をはじめ、身近な素材や廃材などに目を向け、自分たち自身が直接体験をすることをとおして、子どもが遊びの中で表現する面白さや奥深さを考えることから感性を磨くことを目的とした。

「保育の計画と評価」では、そもそも「保育とは何か」、幼稚園や保育所の歴史

や現在の法令なども照らし合わせながら考えた。幼稚園や保育所の子どもたちの集団生活の中での育ちの姿をとらえ、子どもたち一人ひとりの発達や成長を大切にしたい「指導計画」を立案した。立案した「指導計画」を後期の「保育実習演習Ⅰ」や「保育実習Ⅰ」で活かすことができるようつながりを大切にしたい。

「保育実習演習Ⅲ」では、「保育実習Ⅰ」「保育実習Ⅱ」をふまえた学びができるよう、まとめの授業として復習を盛り込みながら、さらに「地域連携や保護者支援」「保育所の役割」の大切さを実際例から学んだ。子ども一人ひとりに寄り添った「応答的保育」を考えた指導案立案し実習に備えた。楽しく実習に行き、子どもたちと直接触れ合う中で主体的に学ぶ姿勢が身につく指導を心掛けた。実習後の振り返りや実習報告会にも力を入れ、先輩から後輩への学びの場を作り、自分自身で問題解決する能力を高めている。

授業以外の活動として、東京都保育士キャリアアップ研修会にて「乳児保育の環境」「乳児の発達に合わせた保育内容」を月2回行う。また、保育現場における子どもの主体的活動からみられる製作遊びの変容の姿から育ちの姿をとらえることや、子ども達の表現する力を高める造形表現のあり方を幼稚園や保育園に調査に行き、10月に本学紀要と保育者論出版予定とする。また、保育者養成教育学会日誌部会に所属し、「保育実習のあり方—日誌の指導の仕方—」について12月学会にて発表予定である。

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

保育者は子どもの感性に寄り添い、認め、共感しあう中で、子ども自身が主体的に自ら伸びようとする可能性を引き出す役目がある。そこで、保育者を目指す学生が、主体的に行動する中で、様々なことに気づいていけるような指導を常に考えていきたいと思う。そして、その気づきに寄り添い、直面している問題や不安になっていることを、どのように乗り越えたらよいのか共に考え、学生自身が主体的に考えることができるような支援を目指している。保育は、子どもに「生きる力」を身につけるプロセスを大切にすることである。知識や技術を身につけることが目的ではなく、環境に興味関心や好奇心を持ち、直接体験しながら様々な気持ちを感じていくことである。直接体験する中で、時には失敗や挫折することもある。しかし、大切なことは結果や成果、見た目ではなくプロセスである。

プロセスの中で、様々な感情を体験する中で工夫したり試行錯誤したり、新たな挑戦をしながら達成感を味わい、自己肯定感を構築していくことこそが「保育」なのである。子ども達の育ちを支えていく保育者自身が「自己肯定感」を持ち、問題解決能力を高めていくことこそ、「真の保育者」として大切な資質であると考えている。

そのため本授業では、本日の学びのテーマを掲げ、学生たちから身近な話題や疑問点・問題点を出し、グループディスカッションやKJ法を行う中で、自分の考えを自由に話し他人の意見を聞きながらまとめ、ドキュメンテーションを作る中で、「自ら学ぶ面白さ」を感じられる授業方法を試みている。すると、学生の出席率はとてもよく、自ら学ぼうと次週の授業内容について質問してくる学生や、準備して授業に臨もうとする学生が見られるようになった。主体的に学ぶことの面白さを実感することによって、子ども達に大切な「主体的に学ぶ面白さ」を自然に保育の中で活かすことができると思う。体験したことのないことは人伝えることは難しいと考える。保育者養成校では、「アクティブラーニング」を大切にしたい学びの方法を行っていくことを今後も教育の真髄にしたいと考える。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

【幼児教育学科2年生「環境」前期2単位】

「環境」の意味を考えながら、五領域「環境」の大切さを学んだ。「身近な環境」の魅力や面白さを直接体験した。授業はくじ引き座席にし、色々な人とかかわる楽しさを肌で感じディスカッションやグループワークを行い、感性の豊かさを目的とした。安全で安心する環境作りのあり方を自分たちの教室環境作りから行うようにした。授業方法は、五領域の「環境」の意味を保育所や幼稚園のVTRを視聴しながら、子ども一人ひとりの姿を感じ、子どもにとって身近な環境のあり方の大切さを学んだ。また、大学構内の自然環境散策から「春の野草を使ってお弁当作り」、「オリエンテーリング」から子どもたちと栽培できる植物や飼育できる虫・小動物を調べポスター発表する中で、発見や驚きの連続であった。その中で、適切な環境作りや子どもの発想力や想像力の豊かさを大切にしたい環境のあり方を考える機会となった。毎回の授業時に振り返りシートに記入し、担当がコメントを入れることで、学生一人ひとりとのつながりにもなり、学生自身が15回の授業の見直しや振り返りをすることができた。

【幼児教育学科 2 年生「保育の計画と評価」前期 2 単位】

「保育とは何か」、「教育」と何が違うのか、乳児期や幼児期は人生の始まりであり、根っこの部分であることの大切さを学んだ。授業内で一回以上は自由にディスカッションを行い、「他人の意見を聞く」ことから「教える」「強制する」「強いる」ことではなく、「見守る」「寄り添う」「共感する」など子どものありのままの姿を受け止める、共感することの大切さを学んだ。保育者は、子ども一人ひとりの可能性や伸びようとする力を支え、きっかけづくりをする、つまり環境構成が大切であることを学んだ。子ども一人ひとりの発達や育ちの姿を捉え、時期や季節、子どもの興味・関心に即した指導計画を考えていくことを目的とした。子どもの発達段階を年齢ごとに捉え、その時期に合わせた援助のあり方をディスカッションしながら考えた。毎回の授業時に手遊びを行い、「手遊び」の楽しさから「導入」の大切さを学び、子どもにとって「きっかけづくり」の重要性を学んだ。2月の保育所実習に向けて、子どもの遊びや生活から記録のとり方、主活動の考え方、指導案作成を行った。後期の五領域指導法授業で「評価」という視点で「保育所児童指導要録」につなげていきたい。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

「環境」や「保育の計画と評価」など演習科目であるため、学生一人ひとりの発言を聞くことができるようにディスカッションやグループワークを多くしたことによって、質問なども自然に出ることも多く、学生一人ひとりの理解に繋がったのではないかと思う。本日の学びの視点を明確にし、学生一人ひとりが授業内容を理解しやすく行った。

授業アンケート結果にも「シラバス通りに進めていた」「理解しやすかった」「意欲的に参加した」という回答が多かったのは授業者として嬉しかった。しかし、事前事後学習のレポートの量が多いという意見もあり、今後はレポート課題をしたくなるようなきっかけや授業内でヒントを伝えるなどゆとりを持った課題の提示の仕方を考えたい。常に学生自身が主体的に学ぶことができるような方法を考えていくことが求められると思う。

5 今後の目標（これからどうするか）

保育現場で臨機応変や応答的な対応の大切さを身に染みるほど感じた授業担当者であるため、応用力をつけたいという気持ちから、結果学生に多くを求め、

教授内容が授業時間いっぱいになってしまうことも多々あった。授業の視点や目標を伝えるが、結局何を言いたかったのだろう…どうしたことなのか…と結論に至らずに授業終了になることもあった。学生は自分で調べ、図書館へ行く機会も増え、結果主体的な授業のきっかけにはなったかもしれないが、もう少しゆとりを持たせる授業方法を考えたいと感じる。

実習指導は後期も通じて行っているが、事務的な事項を伝えることも多く、学生主体ではなく若干教師主導型指導になってしまったように感じる。事務事項にも大切な意味があり、子どもを預かる施設での実習をすることの意識や自覚を持てるような教授方法を改めたい。そして、学生自身が意味を理解し臨機応変に行動できるような支援をしていきたいと思う。

また、保育内容の授業は繋がっている。その繋がりを大切に「子どもの捉え方」「子どもの育ちの考え方」「子ども一人ひとりに合わせた計画」など、授業の振り返りを他の授業に活かすことができるような、点と点を結び付け統括的、多角的な視野を持っているような教授方法を今後の目標としたいと思う。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・ 学生のポスター発表やワークシート（学内のみ）
- ・ ふり返しシート（非公開）
- ・ 学生課題提出シート（非公開）
- ・ 学生授業時ノート（非公開）
- ・ Forms の記述（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 氏名：山下佳香

(記入日：2024 年 2 月 29 日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

2022 年度 4 月より川村学園女子大学の講師として着任し、現在、担当している科目は以下のとおりである。

○幼児教育学科 1 年生

「幼児教育体験学習」 通年 2 単位

「保育内容総論」 後期 2 単位

○2 年生

「環境」 前期 2 単位

「保育内容環境指導法」 後期 2 単位

「保育の計画と評価」 前期 2 単位

「保育実習Ⅰ」 後期 2 単位

「保育実習演習Ⅰ」 後期 1 単位

○3 年生

「保育実習Ⅲ」 通年 2 単位

「保育実習演習Ⅲ」 通年 1 単位

「幼児教育演習ゼミナール」 通年 4 単位

○4 年生

「卒業研究」 通年 4 単位

後期担当した内容について下記に記す。

○1 年生「保育内容総論」 後期 2 単位

1 年生前期「保育原理」を学んでいることを踏まえ、「保育とは」「保育者とは」「保育内容とは」「乳児期の発達」「幼児期の発達」について人間の育ちの原点や成長のつながりの大切さ、人格形成の基本や基本的信頼関係の大切さについて「グループワーク」「ディスカッション」「フィールドワーク」などアクティブラーニングを心掛けながら学ぶ楽しさを共感することを目的とした。

9 名という人数だからこそできる体験型授業を行い、全員が必ず一回は発言

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

「保育内容総論」「保育内容環境の指導法」「保育実習演習Ⅰ」に共通のこととして、「アクティブラーニング」＝「体験型学習」を心掛けた。秋・冬だからこそ自然の様子や木々や葉の様子を見て、触って、感じて、考えたことをみんなで話し合い、グループ活動として「五感」で体験する楽しさをどの授業でもきっかけづくりをし、学生たち同士が様々な友達とかかわれるような環境設定を行った。「原体験」を行うことによって、普段気づかないことに気づいたり、感じたり、考えたり、まとめたりするたのしさを経験したことがより良い学びになった。「応答性のある環境」の理解を目標としている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

- 全ての科目において、本日の学びの到達点や到達点へ向けて具体的な方法を示すなど、自分たちの学びの方向性を示した。「保育内容総論」では、秋の季節を感じるために学内散策に出掛け、そこで発見したものを見立て遊びすることによって子どもは何を感じ、何が育つのか考えるために、実際に自分たちが子どもになって動くことで「テーマ」が見えてきた。その「テーマ」に合わせてディスカッションを行い、ポスター発表することで可視化することができた。⇒「学びの面白さ・プロセスの意味」
- 全ての科目でリフレクションシートを書くことにより、自分たちの学びのプロセスを感じることができ、記録は「感じ・気づきノート」として絵でも記号でも字でも何でも書き、自分が今何を感じ考え、知ろうとしているのか、「自分を知る」ことを心がけ、自分を受けとめることにより他人の気持ちを理解することに繋がる。⇒「自分を知り、相手を受容する」
- 毎回の授業でくじ引き席決めを行い、楽しくゲーム感覚で授業が始まり色々な人と自然にかかわりが持てるようにし、グループディスカッションを多く行い自分の思いを自由に伝えできるだけ全員が発言できるような態勢をとった。⇒「自分らしさを自由に表現する楽しさ」
- できるだけ「原体験」をし、五感を大切にしたい授業を行うようにした。中でも「幼児教育演習ゼミナール」では、身近な環境に触れる中で五感のテーマを決め、視覚や聴覚を意識した手作りおもちゃの面白さ、触覚や味覚を大切にしたい乳幼児の食事、嗅覚を大切にしたい自然環境など「東京おもちゃ美術館」に出掛けて様々なことに挑戦しながら子どもにとって遊びの面白さを体験した。⇒

「五感で感じる楽しさ」

- ・五領域の指導法授業（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）では、それぞれの領域が保育の現場でどのような育ちの姿が見られるのか一つのシートにまとめ、模擬保育をそれぞれの領域ごとに活動を決め、どのように関係し合っているのか考えることができた。五つの領域は保育の中で重なり合っていることを体験しながら考えることができた。⇒「五領域の意味を理解」
- ・「幼児教育演習ゼミナール」ではパソコンでのプレゼンを行い、「保育実習演習Ⅰ」「保育実習演習Ⅲ」ではタブレットを用いて実習事前指導の確認や事後指導のアンケート調査、提出物の添削など効果的に手軽にできることやペーパーレスなど、学生にとっても学習意欲を増す方法の一つになった。⇒「授業方法のICT化活用」

4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・「学びの面白さ・プロセスの意味」⇒授業事前・事後学習で何をしたら良いのか目的がはっきりし、研究室に質問に来る学生も増え、図書館利用する学生も増えた。
- ・「自分を知り、相手を受容する」⇒形に拘らずに思ったこと・感じたことを何でも書くことを伝え、授業中に机間巡視をする中で、「あなたらしさがあって良いよ」と褒めることにより、より学習に対する意欲が増していた。友だち同士を褒める学生も増え、プラス思考で考えることが自然体ででき、「リフレーミング」効果が出た。
- ・「自分らしさを表現する楽しさ」⇒環境の最大の醍醐味は「人と人とのかかわりや面白さ、寄り添う、一期一会」であると学生のリフレクションシートに記されていた。
- ・「五感で感じる楽しさ」⇒子どもの頃に行った遊びや初めてのことにチャレンジする楽しさを感じながら達成感や充実感を感じ、「幼児教育演習ゼミナール」では欠席する学生は0であった。
- ・「五領域の意味」⇒保育における五領域の意味や領域一つひとつの意味が理解できた。
- ・「授業方法のICT化活用」⇒タブレットやパソコンの活用方法によっては、色々なプレゼン方法があることを学生自らが実践した。

5 今後の目標（これからどうするか）

- ・「目標と目的の違い」や「自発性と主体性」の違いのように、物事には段階やプロセスがあることを大切にし、成果や結果ばかりを求めるのではなく、学びのプロセスの意味を理解することが「子どもの成長理解」に通じることを大切にしたい。⇒附属保育園との交流を図りながら「子ども理解」を深めたい。
- ・「保育内容環境の指導法」のように、他教科との協業態勢を作り、教員間で協力態勢を作ることによって、学びの連続性や共通性など学生と共感しながら授業を行っていききたい。
- ・ICT を活用した様々な授業方法を行いながら、学生の学びの幅を広げていきたい。（電子黒板や電子紙芝居、動画・写真を用いたリアル授業、直接体験と間接体験（バーチャル体験）の違いなど）

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・学生のポスター発表やワークシート（学内）
- ・リフレクションシート（非公開）
- ・学生課題提出シート（非公開）
- ・学生授業時ノート（非公開）
- ・Forms の記述（非公開）